

村落社会におけるサポート・ネットワークの研究(下)

— 高齢女性の生活史と家族・親族ネットワーク —

大友 由紀子

目 次

1. はじめに
2. 資料の性格
3. ライフコースとコンボイの変化
4. 農村高齢女性のサポート・ネットワーク
5. ま と め

1 はじめに

個人を原点に据えて社会関係をとらえようとするソーシャル・ネットワーク論は、個人の自立が意識される現代都市社会の人間関係を研究するなかで錬成されてきた。本研究は、これを村落における社会関係の研究に応用しようとするものであるから、まず当該社会での個人の自立観念の有無から議論しなければならないという指摘がなされよう。これまで、村落社会に生活する人々は、人生のさまざまな危機的移行に際し、当事者の自立的な選択よりも、他者あるいはその人をとりまく社会からの要請に忍従するという一面もあった。村落社会においては、家族や村落といった集団からの要請が個人の意志に優先することが決してすくなくない。しかし、たとえ集団からの要請とされるものであっても、それをつくるのは個々の集団構成員であるから、

この点において、村落における社会関係についてもまた、個人を単位としたネットワーク分析が可能になるのである。たとえ集団からの要請に従った人生の決定であっても、個人のその人をとりまく人々との相互作用は、まさにソーシャル・ネットワークとして捉えられるものである。

キャプランは、個人の発達の・状況的危機に対して重要な影響を及ぼす社会関係をソーシャル・サポート・システムという概念で捉えた〔稲葉・浦・南 1987:111〕。パーソナル・ネットワークは、個人の危機的移行の際にその人のその人らしさ（独自性・特異性）、ないしはアイデンティティを保証してくれるものである。そこで本研究では、このような社会的紐帯であるところのパーソナル・ネットワークをサポート・ネットワークと呼ぶものとする³⁾。たとえ「甘え」や依存、集団主義や間人主義、属性主義、依存性など、個人の自立や個としてのアイデンティティのあり方と関係して論じられてきたパーソナル・ネットワークの理論では十分解釈できないと思われる性向であっても、そのような性向こそ、サポート・ネットワークの視点から捉える意義がある。

ここでは、村落社会におけるサポート・ネットワークの特徴を理解するための第一段階として、農村直系制家族における老齢女性の長年にわたる生活史の事例から、彼女たちの対人関係の個人史をつくりあげているところのソーシャル・ネットワークを取り出し、ライフコースとコンボイのいかなる変化の中でいかなるサポート・ネットワークが形成されているかを観察して、その特徴を理解しようとするのである。

2. 資料の性格

小論で扱う資料は、1966年から1992年までの26年間、森岡清美とその門下生とによって5回にわたって反復的に行われてきた、山梨県勝沼町における家族調査（以下「勝沼調査」と記す）の対象の中から、わずか二例を有意に抽出したものである。したがって、資料の代表性について欠陥があり、ソーシャル・ネットワークについての一般仮説の提唱とか、理論分析の例示

的資料の提示をするだけの論証能力は有していない。けれども、オールポートの指摘にあるように、多くの個別事例を斉一性・類型・行動の型を現すように分類・要約するためにも、その前段階として個別事例を詳しく理解しておく事は大切である。ここで紹介する二つの事例は、個別面接法によって得られた被調査者の主観的回想にもとづいた口述史を中心に、26年間の反復調査によるフォーマルな調査票の記述資料で補足している。この二つの異なった資料の併用によって、充分とは言えないまでも、人間経験の因果関係を知る上で、主観面と客観面との双方からの接近がある程度可能になった。個人のネットワークを抽出する場合、回想法のみにたよると、結果的にネットワークの特徴というよりも、その人のパーソナリティーが大きく関与してしまうのであるが、本報告資料は、26年間の5回にわたるフォーマルな完成された世帯調査票によって、その欠陥が大いに補完されている²⁾。〔森岡 1991:251-268〕

個別面接は、1992年1月下旬、一人につき5時間ほどおこなった。話題設定については、オープン・エンドな形式をとったため、口述史の中には、人生を振り返る際の個性と主観性が表現されることになった。

二例の抽出基準は、「勝沼調査」対象世帯全体の傾向を考慮して設定された。勝沼町におけるこの長期反復調査は、当初、二世帯比較による社会変動の研究のためにデザインされ、二世帯夫婦揃いの完全直系家族で、下世代の夫の生年が1921年（大正10）から1935年（昭和10）である108世帯がその対象となっている。1992年1月時点で、上世代の夫11人、妻28人が対象世帯中に残っていた。このうち今回取り上げる二人の後期高齢女性は、生年が明治39年、同40年と近く、現在の家族形態はともに上世代は妻のみで、下世代の夫婦は健在で、さらにその子ども世代が家族核を形成して直系家族を再生産しており、比較的類似した生活状況にあったケースである。また、高齢であっても長時間のインタビューに応じられる健康な人たちであった。これらの選択基準が彼女たちのネットワークを大きく規定している面がある。したがって、いずれ「勝沼調査」の全対象世帯についても取り上げ、ここでの資料の代表性について考察する必要がある。また、パーソナル・ネッ

トワークの研究であるから、相互認識のない二人を選んだ。

3. ライフコースとコンボイの変化

では、二人の高齢女性のライフコースの変化を関与者であるコンボイの変化と関係させてみてみたい。以下は、彼女たちの口述をもとに、事実関係について客観データを参考にして記述したものである。(10 - 12 頁表参照)

〔事例1〕AUケース

明治39年10月3日、O地区の養蚕農家に生まれる。上には姉と兄とがあったが、姉とAUはかなり年が離れていて、AUが物心ついた頃、姉はすでに嫁入りが決まっておき、不幸にも嫁入り後しばらくして亡くなった。そのためAUには姉の記憶がほとんどない。AUの後、弟が2人生まれるが、うち一人は7歳で逝去した。したがって、AUは兄・本人・弟の3人きょうだいで育ったのも同然だという。

学齢に達するとともに、尋常小学校へ入学する。AUにはO区内の同級生が6人あり、うちAUを含めて3人は生涯この地区で生活していたため、この3人は長年の友だちづきあいを続けることになった。この他にも同級生ではないが、やはり生涯O地区で生活している小学校以来の幼なじみが一人ある。

この世代の女子で高等科へ進学する者はほとんどいなかったもので、AUも尋常小学校6年を修了するとすぐに、現塩山市川田にある製糸工場に住み込みで働くことになった。従業員は、女子4～5人、男子2人だけの小さな工場、週に1度、日曜毎に家に帰る生活をおくった。ここへは数え16、17歳までおよそ3年間勤め、その後は嫁に行くまで生家で養蚕の手伝をしていた。AUは、娘時代に裁縫や編み物の学校へ行く事はなかったが、母親が器用な人で、自分で糸をとって絹を織り、家族の皆の着物を作ってくれる人だったので、母のやり方を見てそれらを自己流でおぼえたという。

大正12年、AUが数え18歳の時、隣家の人の口添えで縁談がまとまった。夫は7歳年上の明治32年生まれで、同じO地区出身だが、早くに父親を亡

くしていたので、独身時代には東京へ年季奉公に出ていた。結婚と同時にO地区の夫の生家付近の農家の家屋を借りて所帯を構えて農業に従事し、姑を呼びよせて生家を再興した。

実家で養蚕の仕事を手伝っていた時、関東大震災が起こったのを覚えている。当時東京の印刷所で働いていた弟が、震災のために一旦生家へ戻ってしばらく農業を手伝い、その後すぐに再び東京へ戻り、タクシーの運転手になって所帯を持った。タクシーの運転手は一か月に13～14日働けば充分収入を得られるという時代だった。

結婚して1年後、大正13年に長男を出産し、昭和22年に末の娘を出産するまで、24年の間に男子5人、女子5人、合計10人の子どもを出産した。姑はAUが嫁いで間もなく亡くなったが、徒歩で10分もかからない所に実家があったため、5回目の出産の時まで、母親が通っては面倒をみてくれた。地域に産婆はいなかったが、素人でも器用な老女があって、その人が後産をみてくれた。母親が亡くなってからは、家で農業をしていた夫が面倒をみてくれた。子育てについては、昭和5年生まれの4番目の子どもが小学校2～3年の頃に洋服が流行り出すまで、家族の着物を全て誂えてあげるのが大変だったのをおぼえているが、下の子どもの世話は上の子どもがみてくれるという様子で、子沢山ではあったが、特に苦勞に思ったことはなかったという。ただし、戦時中地域の活動がいろいろとあったにもかかわらず、家の中の事で手いっぱい、そういった事にはほとんどたずさわれなかったという。

戦争で物賣のない時代、実家を継いだ兄が胃潰瘍で、小学校6年の子を筆頭に6人の子どもを残して死去した。この兄が元気な頃は、年に1、2回はきょうだいづきあいもしたが、父親は残っていたものの、以後つきあいらしい事はしなくなった。現在、この兄の長男が実家の跡を継いでいるが、89歳になる兄嫁も入院していて、近所とはいえ、実家との交際はあまりない。

子どもは、第4子までは高等小学校、新制中学を卒業するとすぐに社会に出て独立していった⁹⁾。

昭和27年にあとつぎである長男に嫁を迎える。嫁は、すぐ近所に住むAUの夫の弟夫婦の養女で、血のつながりはないもののAUにとっては姪であ

り、長男はイトコ結婚をしたわけである。また、嫁の養母(夫の弟の妻)は、AUの6人ある幼なじみの同級生のうちの一人で、嫁を迎えて以来、嫁と嫁の養母は、AUの生活において欠かせない存在となる。嫁が来ると、食事の支度などの家事一切を嫁にまかせ、AUは隠居の身分になった。

長男夫婦には、昭和29年、同32年、同35年と計3人の男子が生まれる。これらの内孫に加えて次男以下の子どもたちにも、次々と計18人の外孫が生まれる。娘たちは全員、姑のある所へ嫁に行ったので、彼女たちの出産の時は1週間程度見舞ったくらいで、これとって外孫の世話はしなかったという。

昭和45年に末子が結婚するが、この時の嫁入り支度も全て嫁が整えてくれた。この年、長男の長男が中学校を卒業し、農業に従事する。

隠居の身分にあるAUの暮らしは、大変安定したものであったが、この後、弟の死と夫の死とを相次いで迎える。昭和47年に、東京にいた弟が交通事故で亡くなり、以後、弟の家とのつきあいは途絶えてしまう。その後に弟嫁が亡くなった時も葬儀に呼ばれなかったほどである。昭和50年、夫が脳血栓で倒れ、約70日の入院の後4月に亡くなった。兄弟や夫の死に加え、近年、幼なじみの一人が死亡し、一人が体調を崩し、30年来親しくしていた隣家の友人も引越し、娯楽を共にできる友人は嫁の養母くらいになった。更に、他出した子どもたちとのつきあいも、近年ぐっと減ってきている。娘たちは、その子どもが学齢に達する前は泊まりで里帰りすることもあったが、近頃は日帰りである。

しかし、今日のAUの生活に対する自身の評価は、特に家族生活について非常に高い。嫁に行った娘や外嫁たちが遊びに来るよう促しても、長男の嫁がとても大切にしてくれるので、家に居た方が気楽だという。嫁には埼玉に嫁いだ妹があるが、嫁とその妹は、実家の母親(嫁にとっては養母)の世話と同様に、AUの世話をやいてくれる。嫁の妹もAUにとっては姪である。嫁とその妹は、母の日や敬老の日や、また正月にはお年玉だとかいってAUの身のまわりの物を買ってきてくれる。つい先日も、近くある町主催の敬老会に二人で着てゆくようにと、お揃いのカーディガンを贈ってもらった。嫁は実に気の利く人で、AUは、嫁に「世間を渡して」から自分では始一つ

買う必要もない気楽な生活だと語る。昭和 57 年には、長男の長男に嫁を取り、現在、その娘（曾孫）とまだ未婚の長男の次男と合わせて AU の家族は 7 人である。85 歳の高齢ではあるが、大変健康で、年間を通じて自分の洗濯は全て自分でしており、風呂の掃除は AU の役割ということにもなっている。孫夫婦は共に勤めに出ているので、炊事の主担者は嫁であるが、時には AU もそれを手伝っている。また、AU は畑仕事も出来る。ジャガイモとキュウリの管理は AU の担当である。畑の草取りもすすんでやっている。電話の応対も出来るし、食事やお茶の支度も出来るので、夏の農繁期には留守番としての役割が期待されている。AU は自分の人生を振り返って、「楽しいも苦しいもない、達者で働けたから、わりあい運が良かった。」と総括する。

〔事例 2〕 KO ケース

KO は、明治 40 年 3 月 3 日（旧暦 1 月）に「丁未年天乃河の姓」として、山梨県七里村に生まれたが、戸籍ではなぜか同 40 年 11 月生まれになっている。KO は長女だったため、誕生に際して母方の祖父より雛人形が贈られた。今日でもこの雛人形の木箱が残っていて、KO のアイデンティティの源ともいえる大切な物となっている。筆者がインタビューに訪れた時にも、真先に奥の自分の寝部屋からこれを持ってきて見せてくれた。この木箱の裏に毛筆で書かれた母方の祖父の名に、KO はとりわけ親近感を抱いているのである。

父親は日清・日露の戦争へ行った近衛兵であり、父親と別居していた母親は、大正 12 年の震災の年まで、KO をはじめ子どもたちを連れて、東京の本所松代町にある KO の母方の祖父の実家（母方の祖父は婿入りした人であった）に身を寄せていた。このためもあって、KO は母方尊属への愛着が強い。母方の祖母は KO の母親を出産後若くして亡くなり、母方の祖父は、亡妻の妹とナオツタ（順縁婚）ので、KO には腹違いの叔父があり、その叔父に対しても深い親しみを感じている。

ゆえあって、KO は小学校の時に千葉県朝日町の I 家へもられた。I 家は商売をしていたが、子どもが 2 人しかなくて人手不足だったのだという。しかしその後、11 歳の頃、KO はすぐ下の妹と長野県の製糸工場へ行か

れた。長野県では、昼間工場へ通う傍ら、夜学で勉強した。当時、夜学へすすむには試験があり、成績が優秀な子どもでないと入学出来なかったが、KOと妹はその試験に合格した。そこではKという女の先生に大変可愛がってもらった。充分学校へ行けなかったので、記憶に残る先生と言えばこのK先生くらいだという。妹と信州の温泉に入りながら、「叔父さんの家に行きたいな（家で暮らしたいな）」としばしば話をしていたところ、願い叶って東京にいた母方の叔父が二人を引き取りに来てくれた。そうしてKOと妹は娘時代を東京で過ごすことになる。この間に、KOたちは叔母から裁縫や行儀作法を教わった。

叔父の家で暮らしていた時、関東大震災に会い、一家は郷里・山梨県へ戻る。するとじきに仲立ちする人があって、KOは数え18歳で勝沼町W地区の農家へ嫁ぐ事になる。夫は明治29年生まれの11歳年上の人だった。婚家では、舅は銀行に勤めており、夫と姑が農業に従事していた。嫁に来ると翌大正14年、すぐに長女が生まれ、以後、昭和17年までの間に10人の子どもを出産する。このうち、男子3人、女子5人、計8人が成人した。KOは嫁として、養蚕や小麦づくりに従事しながら子育てをしたが、この間いつも病気がちで、姑の存在なくしてはとでもあれだけ大勢の子どもの世話は出来なかったという。長男を妊娠中に草履で川へ行き、転んで早産になってしまったことがあった。また、末子の五女を妊娠中には、養蚕に使う筵を川で洗っていて冷えてしまったこともあった。このような時、いつも助けてくれたのは姑だった。KOは、嫁としての自分をかなり低く評価しており、と同時に姑に対して今日でも非常に感謝の念を抱いている。姑は大変寛容な人だったと述懐する。KOが嫁に来る時、他家の人から「あの嫁で平気か」と言われたところ、「置いてみせる」と言い切ったという話もあるという。

昭和13年に舅が死亡、昭和17年に末子出産の後、翌昭和18年には姑が亡くなり、KOは一家の主婦となる。また、その間の昭和15年、東京でタクシーの運転手をしていた末弟が、男児を一人残して病死するという近親の死を体験する。

子どもが多かったため、末の二人の子どもは新制高校へ出したが、他はみ

な高等小学校、新制中学校まで出すのが精一杯だった。子どもたちは学校を卒業すると順に家を離れて自分の仕事についた。末子がようやく学齢に達して、昭和 25 年以降徐々に子どもたちが婚出する中、あととり予定の長男が 28 歳で電気事故にあい、急死する。長男は兵役から無事帰ってきたにもかかわらず夭折したのである。この時のショックには耐えきれないものがあり、母方の叔父のあととり息子、すなわち KO の母の実家を継いだ従兄弟の導きで夫と共に立正佼成会へ入会する。以後、今日にいたるまで、KO の敬虔な信仰生活が続いている。同居する家族の話では、KO は信仰を持つようになってからおしゃべり好きになり、性格もだいぶ明るくなったということである。

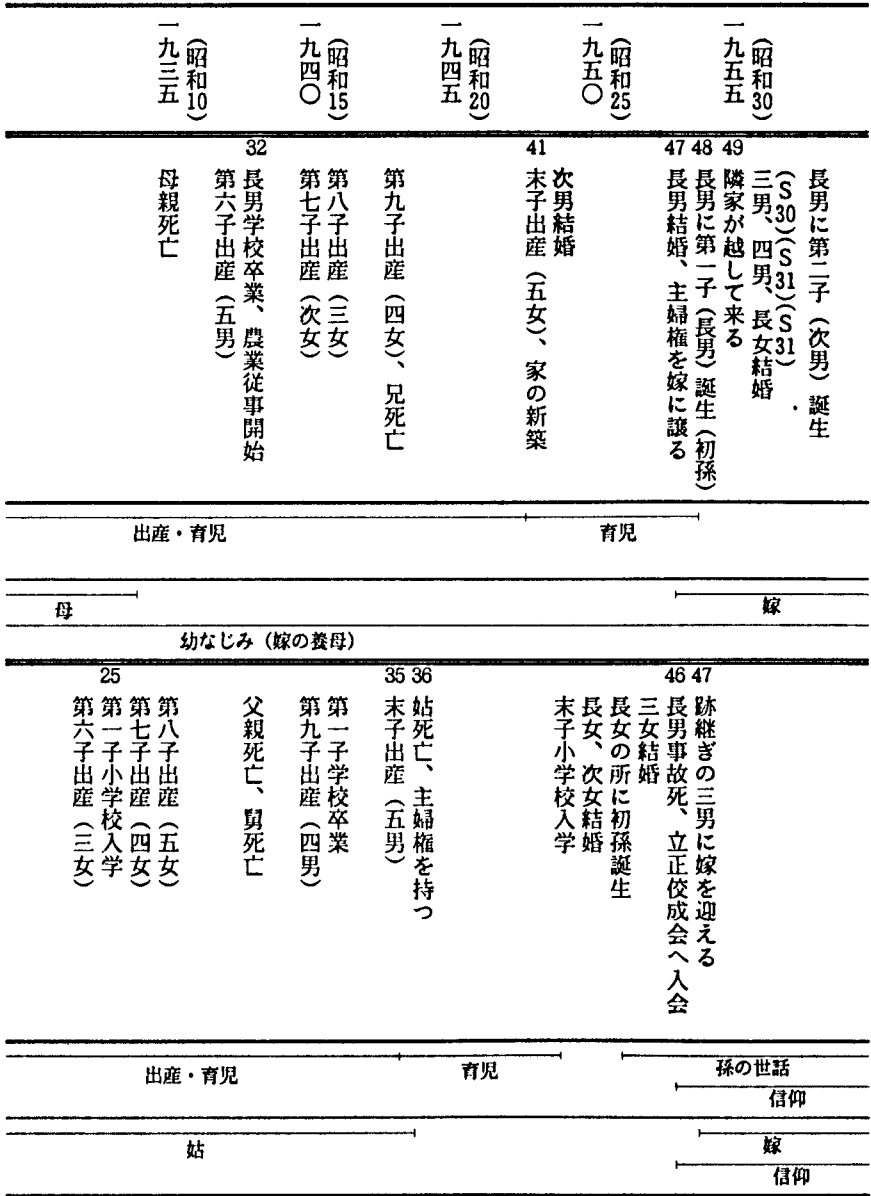
昭和 26 年、当時まだ自分の子どもも学齢期だったが、最初に婚出した 3 女の所に初孫が生まれ、KO は祖母の地位を得ることになる。その後、次々と孫の誕生があるが、KO はその度毎に出産の手助けをした。今日では、孫の数は合計 18 人になる。

昭和 29 年、末子がまだ小学校 6 年生だった時、あとつぎである三男が嫁を取る。この嫁は、埼玉県へ嫁いでいたすぐ下の妹の娘で、KO にとっては姪にあたる。三男と嫁はイトコ同士だったのである。当時、KO は健康がすぐれず、まだ家に残っていた三人の下の子どもの世話は、三男とその嫁がみてくれたようなものだったという。KO と嫁とは、姑と嫁というよりも、伯母一姪という意識が強く、その関係も非常にフランクで、嫁は今日に至るまで、KO の生活を支えてくれる中心的存在である。

昭和 33 年、三男に長女が生まれ、同 37 年には長男が生まれる。この間、末子が高校を卒業して家を離れ、昭和 42 年、KO は還暦の頃、主婦権を嫁に譲り、孫の世話を楽しみとする隠居の身分になる。一方、それと前後して、きょうだいや夫の死を相次いで経験する。嫁の母親にあたる妹と県内にいた弟が死亡。するとじき、昭和 45 年に夫が亡くなる。その後も今日に至るまで、実家を継いだ兄や弟、夫の弟たちの死を次々と経験する。しかし、こうした肉親との死別がある一方、外孫の中に結婚する者もあり、次々に曾孫が誕生してきた。昭和 62 年には、あとつぎの孫息子が嫁を迎え、昭和 63 年には同居する曾孫が誕生する。現在、曾孫の数は 21 人にのぼる。自分の子ど

表. 高齢女性のライフコースとコンボイの変化

		一九〇五 (明治38)	一九一〇 (明治43)	一九一五 (大正4)	一九二〇 (大正9)	一九二五 (大正14)	一九三〇 (昭和5)	
A・Uのライフコース	(年齢)	0		6	12	15 17 18 19	24	
	出来事	誕生		尋常小学校入学	学校卒業塩山市の工場へ就職 と同時に離家	工場をやめて婦家、農業手伝い 結婚 第一子出産(長男)	第二子出産(次男) 姑死亡 姑より家事一切をまかされる 第三子出産(三男)	第五子出産(長女) 第四子出産(四男)
	主なイベント			学校	工場労働		出産・育児	
	主なコンボイ		幼なじみ(嫁の養母)				母	
K・Oのライフコース	(年齢)	0	6	10		17 18		
	出来事	誕生 東京へ移る	尋常小学校入学 千葉県へ移る	き夜学へ通う 長野県へ移る、昼は製糸工場で働		結婚 関東大震災にあい、山梨県へ戻る 東京の叔父の所へ移る	第一子出産(長女) 第二子出産(長男) 第三子出産(次男) 第四子出産(次女)	死亡 第五子出産(三男)、母親、次男
	主なイベント			学校、奉公・工場労働			出産・育児	
	主なコンボイ		妹 叔父 叔母				姑	



(平成2)
一九九〇

幼なじみC体調をくずす

(昭和60)
一九八五

隣家が越してゆく

(昭和55)
一九八〇

76 幼なじみB死亡
長男の長男結婚、孫嫁を迎える

(昭和50)
一九七五

69 夫死亡

(昭和45)
一九七〇

弟死亡

64 末子結婚、長男の長男学校卒業

(昭和40)
一九六五

60 末子学校卒業、就職

(昭和35)
一九六〇

(S38)(S39)(S40)
次女、三女、四女結婚。父親死亡
長男の長男学校入学
長男に第三子(三男)誕生、

嫁

幼なじみ(嫁の養母)

三男の長男に曾孫誕生
三男の長男結婚、孫嫁を迎える
目・三番目の弟死亡
実家の兄、二番目の弟、夫の二番

63

末子結婚、夫のすぐ下の弟死亡
夫死亡
県内にいた弟が事故死

60

嫁の母にあたる埼玉県の妹死亡
主婦権を嫁に譲る

四男結婚
四女結婚、三男に長男誕生
末子学校卒業、離家
四女結婚、三男に長女誕生

(孫・曾孫の世話)

孫の世話

信仰

嫁

信仰

もの子育てが終わらない傍から、孫の誕生があり、続いて曾孫の誕生がある。KOの身近には常に新たな人生のスタートがあり、それと接する事が老後の生き甲斐になっている。

現在KOは、三男と嫁、三男の長男とその嫁およびその長女との、6人家族である。孫夫婦は屋敷内の別棟で家計を別にしているが、嫁が一家の主婦として家事を主に担っており、KOは、きままに危険でない程度の手伝をすればいいという事になっている。KOは生来キレイ好きの性分で、寝具の洗濯やら屋内の掃除など暇をみてはこまめにやっており、家族にもそれが快く受け入れられている。家族以外の人間関係については、幼年期、青年期にあちこち転居したため、また結婚後は出産と育児に追われかつ健康もすぐれなかったため、家族・親族以外に長年交わっている友人はいない。しかし、信仰を持つことで、どのような人に対してもすぐに親しくなれる性格が備わり、けっして閉鎖的な生活をおくっているわけではないという。筆者が訪れた際にも、まるで孫が来たという感じで歓待してくれた。

4. 農村高齢女性のサポート・ネットワーク

以上のライフコースとコンボイの変化をもとに、ソーシャル・ネットワークを家族・親族ネットワーク、近隣・友人ネットワーク、組織ネットワークに分類し、サポート・ネットワークの特徴を整理したい。

① 家族・親族ネットワーク

この二人のライフコースをみると、そのほとんどが家族キャリアによって占められてことがわかる。その第一の原因は、結婚年齢が、AU、KOともに満17歳と、今日のわが国女子の平均初婚年齢と比べて大変若く、また出産回数もともに10回におよび、それにともない子女出産期間も、AUは23年、KOは17年と長期間にわたっているということにある。加齢にともなう発達は、全生涯にわたる継続的過程なので、この成人期前期の家族キャリアの上に晩期の家族キャリアが累積される。多子出産の結果、二人とも晩年

には子どもとその配偶者、孫や曾孫の多くの親族に囲まれた生活をおくっている。もちろん、このように多くの子孫に恵まれるには、この二人が長生きをしているという必要条件があればこそで、長寿の女性を対象とした選定の結果である。

また、この二人は、その人生のほとんどを直系制家族の中でおくっているが、同居する嫁-姑の関係をサポート・ネットワークとして上手く機能させ、安寧を保持している事が確認できる。また、二人とも同居するあととり息子の嫁が妹の娘、すなわち姪だったため、嫁-姑間の軋轢が生じることも少なく、むしろ子どもの独立による親役割の縮小や相次ぐ肉親の死去とそれにとまなうネットワークの喪失といった、老年期特有のコンボイの喪失の際、役割移行をスムーズにするコンボイとなり、最も重要なサポート提供者となっている。AUはライフコースを語る中で、嫁は実に気の利く人で「世間を渡して」からは自分では給一つ買う必要もないとか、嫁がとても大切にしてくれるので娘の所へ遊びにゆくより家に居た方が気楽であると言っている。KOについても、嫁は親戚づきあいが大変うまく、KOの成人した子どもたちも気兼ねなく遊びに来てくれるので、O家は近所でも年間を通じて最も親戚が集まる家だという。高齢期にあるAUやKOは、嫁との間に非常に重層的な関係を結んでおり、その関係を上手く保つことで、安寧を保持しているのである。このような社会関係は、一見、高齢者にとって「自己決定の原理」に反する依存的な態度と受け取られるかもしれない〔藤崎1992〕。しかし、彼女らにとっての嫁は、自分自身のニーズを充足させてくれるサポート・ネットワークのキーパーソンであり、彼女たちの依存的にもみえる行動もサポートを動員する上での主体的なマネージメント行為なのである。AUは、嫁を媒介に、現在では唯一の友人となった嫁の養母とのネットワークを保持しているのであり、KOの場合も嫁のアレンジメントによって、他出した子どもや外孫、外曾孫との親族ネットワークを保持しているのである。

また、KOの場合、自分史を語る上で、まず第一に出生にまつわる雛人形の木箱を取り出し、そして、過去帳を持ってきて、祖父をはじめとする先祖の話語り始めた。KOは立正佼成会の信仰をもっているため、とりわけ親

族の系譜の中にアイデンティティを見いだしていた。KOのアイデンティティ維持にとって、それをささえる親族は、死後もなおサポートティブなネットワークを保持し続けていることがわかる。

② 近隣・友人ネットワーク

AU、KOのライフコース上にみる家族キャリアおよび家族・親族ネットワークには、多くの共通性がみられた。しかし、二人の近隣・友人ネットワークには、逆に差異が目立つ。AUは、青年期に工場労働に出ていた2、3年を除くと、人生85年の大半を同一地区で生活しており、同性の幼なじみの中で同様の経歴をもつ数人と、生涯を通じての長年の友人ネットワークを形成している。この友人たちとの結びつきは、単なる幼なじみとしての友人関係を越えて、その子ども同士も友人関係にあるとか、嫁の養母のケースのように、夫同士が兄弟でありかつ子同士が夫婦という複層的な姻戚関係にあるというような重層的な関係になっている。

他方、KOの場合は、幼年期、青年期に山梨、東京、千葉、長野とあちこちを転々としていたため、友人関係を形成する機会がなかった。結婚以降、現在の地区に70年近く居住しているが、子女出産期間が30歳台半ばまで17年におよんだため、親密な友人関係を形成することがなかった。隣家に5歳年下の女性と、7年前に亡くなったが親戚関係でもあった5歳年上の女性がいて、近隣関係というよりも友人関係に近いつきあいをしたというが、AUにみるような親密な友人ネットワークではない。KOは、自身の子どものための出産・育児役割が終わった後も、多くの孫や曾孫の誕生に際し、育児の補助的役割を演じており、常に自分の得意とする親族役割を遂行し、自分らしさを維持している。また嫁との重層的な結びつきもあって、家族・親族ネットワークの中で、彼女のサポート欲求はある程度充足されている。選択的な友人関係を形成する習慣を持たないKOにとって、非選択的な家族・親族ネットワークを上手くコントロールする方が、自己イメージおよび安寧を保持するうえでより効果的なのである。

③ 組織ネットワーク

AUもKOも、組織ネットワーク形成について積極的なパーソナリティを有している方ではない。AUは、自分が若い頃は今の婦人のようにさまざまなグループ活動はなかったと述べる。戦時中、地域の活動がいろいろあった時にも、出産・育児に追われていたこともあって、必要最小限の事だけで済ませ、ほとんど参加しなかったという。KOについても、若い頃は出産・育児に加え、健康がすぐれないこともあり、組織ネットワークを形成するゆとりはなかったという。戦後日本における中年女子の社会進出は、多産多死から少産少死へという人口学的変化による子離れ期の登場という、ライフサイクルの変化の波及効果であって〔森岡 1972:123〕、明治40年前後に生まれ、大正期に結婚したAUやKOの場合には、第一次的関係を越えた社会での活動に参加することが少なかった。しかし、調査地域のAUやKOと同年代の高齢者の中には、高齢者を対象とした町単位の活動に積極的に参加する者もあるので、組織ネットワーク形成にあまり積極的ではないこの二人のケースは、単に家族キャリアに規定された性向というのみならず、ある程度個人のパーソナリティが関与しているものとも思われる。

ただしKOの場合、立正佼成会に所属し、敬虔な信仰をもっている。サポート・ネットワークの研究報告に、信仰が生活のなかで機能している事例をみかけることは少なくない⁵⁾。

5. まとめ

小論では、個人が自分らしさを常に発揮し、アイデンティティを維持するために、何らかの形で寄与するコンボイとの相互作用をサポート・ネットワークとしてとらえ、農村直系制家族の中で人生のほとんどをおくってきた、明治生まれの二人の高齢女性の事例より、彼女らのサポート・ネットワークの特徴と、それを規定していると考えられるライフコースの変化について、整理を試みた。

これによって得られた第一の知見は、明治40年頃に生まれたこの二人の

場合、ライフコースの主要な軌跡のほとんどが家族キャリアによって占められており、したがって彼女らを取りまくコンボイも、若干の近隣・友人ネットワークを形成するものもあるが、家族・親族ネットワークの中でほとんど完結しているという事である。つまり、友人ネットワークや組織ネットワークという選択的な関係形成によってつくられるネットワークは、彼女たちのサポート・ネットワークのごく周辺的なものに留まっており、非選択的に形成された社会関係によって個人的ネットワークがほぼ完成されている。生涯ほとんど地理的移動のなかったケースでは、人生のほぼ全期間をつうじて維持される友人ネットワークも確認できたが、その関係も地縁や血縁による第一次的な社会集団の中で形成され、維持されているものであり、個人の主体的選択によって形成されたものとはいえない。

次に、第二の知見として、嫁一姑の特殊な二者関係の存在がある。ここでみた二つの事例では、イトコ婚という慣行が行われたため、嫁一姑の関係は姪一伯母・叔母という血縁関係の上に付加された関係であり、単なる義理関係ではなかった。二人の高齢女性の安寧を保障するサポート・ネットワークは、嫁の存在をとおして提供されている傾向が強く、嫁は、彼女たちにとって、彼女たちのパーソナル・ネットワークのほとんど全てのメンバーと結びつきをもつ本質的メンバーであって、サポート・ネットワークのアレンジャーとなっている。また、それは多様なサポートを提供する「何でも屋」(generalist)⁹⁾でもある。この「何でも屋」からのサポートをうまくコントロールすることが、彼女たちにより直接的な安寧をもたらす。従来、このような人間関係は、わが国の高齢者の依存的な性格として理解されていたが、この場合においては、彼女たち高齢女性は「何でも屋」である嫁に自分自身のニーズを正確に伝えるという役割を負っており、その役割遂行の中に自分らしさを発揮し、安寧を見出すのである。

最後に、この二人の高齢女性のネットワークの範囲が狭いという点を指摘しておきたい。彼女たちが生活史を語る中で言及されるコンボイは、極めて同質的な社会関係をもつ人々である。彼女たちの成人期の役割は、出産・育児を始めとする性別分業に特化していたが、高齢期のネットワークをみると、

その中心は嫁や同性・同年配の友人であり、彼女たちと同様の役割経験をもつ同性のコンボイが特徴的である。自己の出自や人生の前半部分を語る際には、父親や祖父、叔父、兄弟などの異性についても触れていたものの、晩年に至っては一層その傾向が強まっている。このような同質的な狭いネットワークは、彼女たちが得意としてきた人間関係が通用する社会を成しており、高齢期にある彼女たちが自分らしさを維持するためにより適しているものと思われる。

以上のまとめは、農村直系制家族における、わずか二人の後期高齢者の極めて個別的な事例から導きだされたサポート・ネットワークの特徴であって、この知見をもとにサポート・ネットワークの一般理論を展開することはできない。ここでは、理論的研究をする際に必須となる分析規準設定の前段階として、非常に徹視的な個別事例研究を試みたものにすぎない。したがって、今後本論文の事例が、村落社会におけるサポート・ネットワークのどの点についてどの程度代表しうるものなのかという検討が必要となるが、それには、個人的記録の処理について十分に吟味しておかなければならないという大きな課題も残っている。〔森岡 1991:251-268〕

〈注〉

- 1) したがって、本研究はソーシャル・サポートの定量的把握をねらいとするわけではない。
- 2) 「勝沼調査」の調査対象者は、直系制家族の家族核を構成する夫婦で、調査項目は実態と意識との双方が含まれている。とくに、実態に関する調査項目の回答は、ある程度客観的データとしてみなせるものである。
- 3) 長男は学卒後、岐阜県の軍需工場で働き、21歳で兵役に就き、戦後は自宅の農業に従事。次男は数え18歳で海軍志願兵となり、戦後は勤めに出た。三男は学卒後、軍需工場に動員され、戦後は横浜のN社へ入社した。四男は東京のA社に入社し、そちらで所帯を持つ。長女は、学卒後勤労奉仕に借り出され、後に編み物と裁縫を習って、山梨市へ嫁いだ。五男は、高校卒業後甲府市で珠算を習い、三男の口利きで同じく横浜のN社へ入社した。次女は中卒後すぐに家

を離れて働き、塩山市へ嫁いだ。三女、四女は、高校卒業後家を離れて横浜市、八代町へ嫁ぎ、五女は高校卒業後、塩山市の酒屋へ通勤し、数え 22 歳で八代町へ嫁いだ。

- 4) KO については、子女の産育の際に姑が非常にサポートティブな役割を演じていた。
- 5) 信仰が人々の生活に非常にサポートティブな作用をしている場合、それがソーシャル・ネットワークとみなせるかどうかという問題があろう。KO の信仰生活は、宗教教団内での社会的活動に関与しているわけではなく、個人の内的な信仰である。特に高齢期に至っては、体力的な問題もあって、教会への出席頻度も少なくなっている。しかし、彼女にとって、信仰をつうじてもらたされる心の安寧が彼女の自分らしさを維持させているのであるから、信仰対象はコンボイということができる。
- 5) Bogat は、多様なサポートを提出する「何でも屋」(generalist) と、特定のサポートを供与する「専門家」(specialist) のうち、「何でも屋」の存在がサポートの満足度に強い影響力を持っている事を指摘した [稲葉・浦・南 1987:121]。

〈参考文献〉

藤崎宏子 1992 「サポート・ネットワークへの期待」『老年学年報』第 2 巻
pp.43-51

稲葉昭英・浦 光博・南 隆男

1987 「『ソーシャル・サポート』研究の課題と現状」, 『哲学』
第 85 集, pp.(109)-(149)

森岡清美・望月 嵩

1983 『新しい家族社会学』培風館

森岡清美 1991 『決死の世代と遺書』新地書房

野沢慎司 1992 「都市家族研究における新たなパースペクティブーパーソナルネットワーク論からの再検討ー」, 『静岡大学人文学部人文論集』第 42 号, pp.53-76

[付記] 本研究は、平成 3 年度科学研究費補助金 (日本学術振興会特別研究員奨励費) を受けて行ったものである。